



A L P S CAREER

<シリーズ連載：今求められるキャリア開発 第20回>

「未来凶」を描く留学

晴天の霹靂へきれき

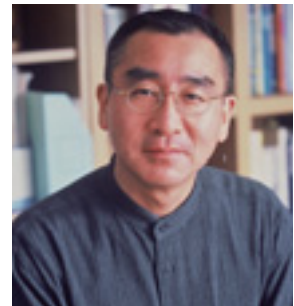
はじめにぶつかった困難な事態から私の留学記の紹介を始めたい。

留学準備を進めていた一九九六年の夏、担当窓口であった研修部長から呼び出された。「財政課の予算査定で来年度の海外大学院派遣研修の事業費がカットされそうだ。」と宣告された。目の前が真っ暗になった。それまで数年間にわたって、英会話学校に通い、TOEFLの点数を出すために学校に通い、家族の邪魔にならないように夜明け前からファミリーレストランで試験勉強をし、昼休みも脇目もふらずに試験の問題集を解いてきた。「部長、冗談じゃ

ないです。何とかならないんですか？」と必死に食い下がった。研修部長も私が留学に強い希望を持っていることは承知していたので、目を閉じて唸ったまま動かない。「二晩、時間をくれ。」ということとで、その日は別れた。

当時、私は既に三六歳、本格的に留学に向けて準備を始めて二年余りが経過していた。私自身、年齢からみてこの時期を逃せば留学は断念せざるをえない状況にあった。バブル崩壊後の財政逼迫の折、さまざまな予算がカットされていくことは、自分の担当している事業でも起きていた。

『でも、何でよりによって留学事業が切られなければならないのか。』納得が



久住 剛

神奈川県知事室（政策補佐官室）室長代理
特定非営利活動法人パブリックリソースセンター代表理事

【くすみつよし】1980年明治大学卒業。1999年ニューヨーク大学修士課程修了。神奈川県に勤務のかたわら、日本ネットワーク会議などで、市民活動、NPO、行政とNPOの協働等に関する調査研究及び実践に長年携わる。自治体学会(1986年)や日本NPOセンター(1996年)創設に参画。横浜国立大学非常勤講師、自治創造コンソーシアム常務理事などを務める。共著書に『NPO基礎講座』『パブリックリソースハンドブック』等。

いかなかった。これまでの苦労や投資が水泡に帰してしまうという焦りもあった。それ以上に、未来に向けて「夢」が消えてしまうという絶望感が押し寄せてきた。いろいろなことが頭を巡った。眠れぬ夜に思い詰めた。『夢を実現するには、県庁を辞めて自費で留学するしかない。』

翌日、研修部長から電話があつた。私からは、重ねて切迫した思いを伝えた。部長からは意外な言葉が返ってきた。「嘆願書を書け！」私は、『何ということか、そんなことで事態が変わるはずはない。』とがっかりした。しかしその時、部長は財政課の経験もある方だったことを思い出した。部長は、財政課長あてに嘆願書を書けば、自分が課長に掛け合つてみ

ると言うのだ。

こういう事態である以上は、やぶれかぶれで、嘆願書でも何でも書いてみようという気になった。

私からの嘆願書も使って、研修部長は粘り強く交渉に当たってくれた。おおよそひと月ほど経った朝、「やつたぞ、継続だ。」と部長の声が飛び込んできた。「ありがとうございました。」電話を握りしめて、頭を下げていた。本当にうれしかった。

これで、ようやくスタートラインに立てたのである。私の留学奮戦記は、こうしたドラマが最初に思い出されるのである。ちなみに、留学制度は私の期も含めて三期継続されたが、その後は、休止となってしまう。ただし、神奈川県では二〇〇八年度から、職員の政策形成能力の向上を目指して、形態を変えて留学支援制度が復活した。

留学のきっかけ

私は、一九八〇年の県庁入庁の頃から、市民活動やボランティア活動に、実践や研究で関わってきた。

「市民社会を創造」のための「ネットワーキング研究会」という研究会において、一九八〇年代半ば頃に「NPO（民間非営利組織）」に出会った。現在は、「NPO」という言葉を知らない人はいない

が、当時、日本には「NPO」という言葉も形もなかった。仲間や私自身も海外調査に出掛け、アメリカやイギリスなどのNPOの仕組みや実態を調べていった。私は、一九九一年に海外派遣研修に参加し、二カ月半にわたって、欧米のNPOにインターンとして働きながら実地調査をしたり、NPOの全国会議への参加、訪問調査などを行ってきた。

そうした調査から、日本においても近い将来、NPOが必要となり、そのための法制度などの社会的な「仕組み」が求められるという確信を持つようになった。仲間や先輩と組織していた「日本ネットワークカーズ会議」というボラン

タリーな研究団体が一九九二年に全国的なフォーラムを開催し、日本で初めてNPOを本格的に紹介し、日本にNPOを導入・定着させていくための「戦略」を討議した。その際にも、海外で培った人的なネットワークにより、当時の最先端のNPO実践者を講師として招聘することができた。その後、民間助成財団からの支援などを受けて、海外調査や研究会を続けてきた。一九九四年にはイギリスで開催された「NPOの法律に関する国際会議」に日本から訪問団を仕立てて参加し、翌一九九五年には日本において「英米のNP

O法に関するフォーラム」を開催した。こうした調査研究と併行して、日本におけるNPO法制定の運動にも参画し、一九九八年に「特定非営利活動促進法（NPO法）」の制定を成し遂げることができた。現在は三万団体を超える特定非営利活動法人が全国でさまざまな分野において活動を展開するに至っている。

さらに、市民活動や経済界のメンバーの協働によって、アメリカ調査を含む約一年半の準備を経て、NPO活動を支え、リードする基盤組織である「日本NPOセンター」を、一九九六年に創設にこぎつけた。



指導教官のロイ・スパロー教授の授業

大学への通学路（遠くに今は無き、ワールドトレードセンターが見える）



このように次々と、法律制度や支援センターなどが出来上がっていった。これは一〇年程前に描き出していた「市民社会創造に向けた戦略計画」のプロジェクトが、予想を遥かに上回るスピードで実現していったことを意味する。かつて、二〇年は掛かるだろうと予想していた計画が、予想外に早く実現するのは、嬉しいこと

には違いない。しかし、私は、はたと困った。『では、この先の将来、自分は一体何をすればよいのか？』将来の目標を見失ってしまい、焦りを感じ始めたのである。

前置きが長くなったが、私の留学への決意の背景には、「次の戦略」を見つけないといけないという焦燥感があったのだ。すなわち、「日本に誕生したNPOが十分に機能するためには何が必要なのか」「次に出てくる問題は何か」「NPOと行政の協働はどうすれば効果的にできるのか」などを予測し、戦略プロジェクトを描き出す必要を強く感じたのだ。そのためには、短期的な訪問調査ではなく、じっくり腰を据えて海外留学し、N

POの理論を学び、現実の姿を把握してこなければならぬと思いついた。特に、NPOと行政の協働のあり方を探求したかったので、NPO先進国であるアメリカを留学先に決めた。

そうした準備の最中に、前述のような「危機一髪」の困難に遭遇したわけである。かろうじて制度存続となり、おかげで留学生の選抜試験に臨む機会を得た。そして、他の若い志願者を抑えて候補者を選ばれた。TOEFLも何とか基準点を超え、願書や小論文などを一〇校近く出し、なんとか晴れて第一志望のニューヨーク大学に留学を果たすことができたのである。

ニューヨークでの留学生活

留学先はニューヨーク大学（NYU）のロバート・F・ワグナー校という「公共サービス（政策）」のための大学院で、その中の「非営利マネジメント」コースを選択した。

一九九七年の夏、前年に立ち上げた日本NPOセンター主催の「日本NPOフォーラム」を、神奈川県も実行委員会に加わり、横浜で開催した。NPOフォーラムには私の友人であるアメリカのNPO支援団体の副理事長を招聘することができた。横浜でのフォーラムが成功裏に閉幕した直後、私はニュー

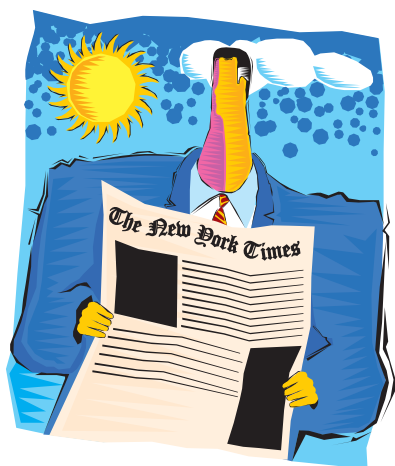
ヨークに向けて出発した。

（1）暮らし

ニューヨークでの生活の始まりは、アパート探しからだ。アパートの情報紙で当たりは付けていたが、実際は日系の不動産屋に頼んで、いくつもの物件を見て歩いた。結果として、大学から歩いて通える場所で、かつ安全なところをということで、ブロードウェイと五番街が交差する付近のドアマン付きのワンベッドルーム（1DK）のマンションを選んだ。ただ、住宅費だけでも県からの生活費補助の倍を上回るようになったのは痛かった。とはいえ、マンハッタンに住めたことは生涯の思い出となった。

（2）楽しみ

ニューヨークのど真ん中に住んでいたという、ミュージカルや美術館、コンサートなど、「さぞ、遊んだのだろう」





お世話になった国際交流協会のボランティア、スーザンさんとともに
(写真上)
雪のワシントンスクエア前の校舎
(クリスマスリースが掛かっている)
(写真下)



ここで食べていくのか」「持ち帰りか」ということだ。さらに「ソーダ？」と来る。これは、「コーラか、オレンジジュースか、どの飲み物にするか」だ。ほかに好きだったのはハンバーガーだ。いくつもの有名店があったが、私のお気に入りにはエンパイアステートビル近くのピアホールの「バッファローバーガー」だった。(残念ながら、数年前に行ったら閉店してしまっ

ていた。) さて、「本業」の学生生活だ。NYUでは留学生はコースワークの前に付属の英語学校に二カ月余り通うことが義務付けられていた。ウクライナやイスラエル、アルゼンチンなどさまざまな国からの留学生の仲間ができ、その後も交友が続いた。 <コースワーク> コースワークでは、統計学やマイクロ経済などの基礎科目から、サービス論、非営利マネジメント論などの必修科目、さらに人材マネジメント、プロジェクトマネジメント、環境問題、都市問題などの選択科目が連なっている。どの科目も、週に数十ページの資料を読み、レポートを書き、期末試験などがある。これを数科目こなしていくのだから、楽ではなかった。私の英語力が低かったせいもあるが、「ネイティブスピーカーと同じスピードで英文資料を読むと三割しか理解ができず」、「ネイティブと同程度に理解するためには三倍の時間をかけて資料を読まなければならない」というのが実情であった。まして、文章を英文で書くのはさらに時間が掛かった。NYUの図書館は開架式のコーナーは深夜〇時まで開いているし、自習フロアは二四時間オープン

と言われることが多い。しかし、それは誤解である。確かに、休暇時に、日本からの来客があった際に、案内をしてミュージカルも観たことはあったが、それほど回数ではない。夏休みも、夏期講座の授業を受けていたし、土日も調査や図書館通いに明け暮れた。本当に、学業や調査研究にとっぴり浸かっていたというのが実情なのだ。 では、楽しみがなかったかと言えば嘘になる。NYUはワシントンスクエアという公園の周りに大学の建物が点在している。その大学まで歩いて行く途中には、ユニオンスクエアという広場があり、週に四日間は近郊の農家が新鮮な野菜などを売る「グリーンマーケット」が開か

れる。何種類もあるリンゴ、大きなカボチャ、香り高いバジルなど……、市場の間を少し寄り道しながら歩くのは、ささやかだが真の「ニューヨーク」としての楽しみの一つだと思う。 もうひとつは食事である。マンハッタンには、世界中の国のレストランがある。フランス、イタリアはもとより、アフガニスタン料理、チベット料理という珍しいレストランまである。少々高いが和食の店や焼き鳥屋もある。よくお世話になったのはテイクアウト中華料理屋だ。当時は五ドルくらいで食べきれないくらいの量があった。そうした店で戸惑ったのは、店員が「トウステイ? オアトウゴ?」と聞いてくることだ。要は、「こ

(3) 学生生活 <語学学校>

さて、「本業」の学生生活だ。NYUでは留学生はコースワークの前に付属の英語学校に二カ月余り通うことが義務付けられていた。ウクライナやイスラエル、アルゼンチンなどさまざまな国からの留学生の仲間ができ、その後も交友が続いた。 <コースワーク>

している。私も深夜まで「図書館籠り」をしていた日が多かった。夜半を過ぎると泊まりにくる不思議な「常連」もいた。

授業でユニークだと思ったのは、プレゼンテーションである。グループで課題を決めて、団体にヒアリング調査に行き、それを分析しクラスで発表する。私も病院やまちづくり団体、郵便局などさまざまな調査に出掛けた。日本では考えられないのは、プレゼンテーションに対する力の入れようである。パワーポイントよりもより、写真やグラフも多用する。しかも、リハーサルを繰り返し、発表方法をグループで改善していく。最後には、「本番ではどのような服装にするか」まで決めていくのには驚いた。いつもはジーンズやTシャツの学生が、その日ばかりは、スーツで「決めてくる」のだ。しかも、服の色まで合わせるのには舌を巻いた。

〈修士論文〉

修士課程の修了のためには、二通りの最終関門があった。ひとつは、実際のNPOを選んで、その団体のコンサルティングをグループで実施するという言わば「卒業制作」のような作業。もうひとつは「修士論文」である。

私は、「NPOと行政の協働」の実態と課題を究明することが留学の目的でもあったので、修士論文を選択した。論文は、二人の指導教官を選び、論文のテーマや構成、調査方法の決定を指導しても

らうことから始まる。私は、まちづくり・地域経済振興の分野におけるNPOであるB I D (Business Improvement District) に着目し、B I Dと市政府とのパートナーシップをケーススタディとして研究することにした。まず、アメリカにおけるNPOの歴史と協働に関する理論研究を行った。その後、市内の四〇団体のB I Dにアンケート調査を実施するとともに（一七団体から回答）、

三つのB I Dと市政府へのヒアリング調査を行った。調査票設計や論文作成には、本当に苦労した。英文のチェックを有償で依頼する一方で、国際交流協会でお世話になっていたボランティアの方にも大変なお世話になった。

NPOの歴史から実態調査、さらにはそれらを踏まえた「日本社会への提案」までという幅広い研究領域を設定したため、論文の量は膨大なものとなった。笑。笑話だが、指導教官に素案の段階で原稿を持ち込んだ際に、「重さで勝負するのか？」と教授からジョークを言われたくらいだ。その時は、「冗談じゃない中身に決まっている」と切り返した。

論文の量のせいもあってか、指導教官からの「合格通知」がなかなか届かず、とうとう卒業式の当日までに通知をもらえなかった。万が一のことも想定し、また「縁起も担いで」卒業式には出席しなかった。これは心残りであった。最後

には、論文も無事にパスし、課程を修了することができ、ほっとした。

留学後

留学の目的であった「次の戦略目標」としては、「新たな市民社会の創造」と、そのための非営利活動の「社会的資源（ヒト・モノ・カネ・情報）創出」という目標を描き出すことができた。

日本に戻ってから、まず、二〇〇〇年に新たなシンクタンクとして「特定非営利活動法人パブリックリソースセンター」を創設し、NPOと行政の協働も含めた調査研究やプロジェクトを実施してきている。現在の県庁での職務は、政策面で知事を補佐することだが、その中でも「NPOと行政の効果的な協働」は重要なテーマのひとつとなっており、留学の成果を活かすことができている。

